

◆第一話 魔法少女リリィダークネス

魔法少女リリィダークネスとして活動している黒桐月奈こくとうるなは、普段は私立白雪女子高校に通う極普通の女子高生だ。

そんな彼女は現在、魔法少女になる力を彼女に与えた魔法界の賢者たちからの指令を受け、巷を騒がせる怪人を討伐するために動いていた。

セイントの輪というチャットアプリを介して指令を受け取った彼女は、ひとまず怪人が出現したというポイントにやって来ていた。

制服姿で街角に立った彼女は、周囲を見回して誰にも見られていないことを確認した上で、変身する。

「セイントエナジー・メイクアップ……！」

その身体に纏っていた制服が一瞬で掻き消え、その後には魔法少女のコスチュームを着た月奈が——リリィダークネスがいた。



首尾よく変身したダークネスは、その場にしゃがみ込んで地面に手を突くと、闇魔法を発動させる。

すると彼女の影がぐにやりと変形し、周りの影に繋がって、さらにその繋がった影がまた別の影に繋がって、と繰り返して大きく広がって行った。

影を用いた探査術であり、それによってダークネスは通常よりも遥かに広範囲の場所を探れていた。

蜘蛛の巣のように広がっていくイメージで影を広げて行き、そしてその影に何かが触れる。

(……いた！ 上手く隠しているけれど……私は見逃さない……！)

目を見開いたダークネスは、反応があった方向へと向かう。

走りながら、パートナーであるリリイシャイニングに電話を掛けた。

本来であれば、二人はパートナーとして一緒に行動しているべきなのだが、この日はなぜかシャイニングと連絡がつかず、一緒に行動できていなかったのだ。

電話のコールを待つこと数十秒。ようやく相手が電話に出たことで、ホッと胸を撫で下ろす。

「せいち聖羅……いえ、シャイニング？ いまどこにいるの？ 私は討伐指令を受けた怪人を補足したところなんです、来れそう？」

二人は本名を教え合っているが、魔法少女として活動している際には、本名では呼び合わないことにしている。

『……ああ、すみません。大丈夫ですわ』

電話の向こうから聞こえて来た声に、思わずダークネスは足を止めていた。

「シャイニング……？ あなた、なんだか様子が……」

『なんでもありませんわ。実は、いまわたくしも怪人を追いかけているところでした』
「なんですって!？」

『ああ、でもわたくし一人でも倒せそうな雑魚のようですので、心配はご無用ですわ。申し訳ありませんが、逃げられては困りますので、切りますわね』

「ちょ、ちよつと! シャイニ……切れた」

まくしたてるように状況を説明され、そのまま通話は切れてしまった。

怪人を追いかけていて余裕がなかったといえはそうなのだろうが、それにしてもなんだか妙に違和感を覚えてしまう。

ダークネスは一端討伐依頼を受けている怪人を放置してシャイニングの方に向かうべきか考えたが、彼女がどこにいるかもわからないのでは、そちらに行きようがない。

もう一度電話をかけようとしたが、恐らく出られない状況であることは想像に難くない。

(あとで落ち着いたら何があったか聞けばいいわ……この反応が消える前に、仕留めないと……!)

闇の魔力が反応している場所に、ダークネスは急いだ。

確かに感じていた嫌な予感を振り切るように。

闇の魔力を感じた裏路地に到達したダークネスは、油断なく周囲を見回していた。

(今回の怪人は、憑依能力を有した怪人らしいから……誰かに憑依される前に仕留めないと……)

そんなことを考えながら裏路地を歩いていた彼女は、ふと路地裏の一角で微かに声がしていることに気付いた。

「そこね……!」

油断なく、いつでも攻撃出来るように影を練りながら、その一角を覗き込み——練っていた影が解けてしまった。

なぜなら彼女が覗き込んだ場所には、あられもない格好をした同年代の女子がいたからだ。

「んっ……ンあ……っ、あっ、ああっ……!」

壁を背にしゃがみ込んで、その手を自分の体に這わせている。

制服を半分脱いで下着を晒し、その下着の中に手を突っ込んで弄り倒していた。

それは間違いなく、女性が自慰をしている姿だった。

ダークネスが硬直してしまった理由はそれだけではない。

(こ、この子……! 生徒会の……!)

それはダークネスの通う高校で、生徒会の書記を務めている女子だった。

ダークネスも生徒会に所属しているので、顔見知りだったのである。

引っ込み思案で目立たない感じの存在だったが、同じ生徒会に入っていればある程度は話をする。

そんな彼女の痴態が突然目の前に展開されるのだから、その動揺が如実に表れても仕方なかった。

(そ、そんな趣味があったなんて……! 見ちゃ、悪いわよね……!)

慌てて体を隠そうとしかけたダークネスだったが、その前にバッチリ目が合ってしまった。

生徒会書記の彼女は、普段の姿からは想像することも出来ない、はしたない表情を浮かべていた。

その顔を見た瞬間、ダークネスは閃きを得る。

（私は、馬鹿なの……！？ 今回の討伐対象は、憑依怪人でしょうが！）

憑依される前に倒そうと考えていたが、すでに憑依したあとなわけだ。

ダークネスは彼女の正面に立ち塞がるように、破廉恥な格好をした女子の前に立った。

「そこまでよ！ 憑依怪人！ い、いますぐその子から、出て行きなさい！」

そう勇ましく命じたはいいものの、ダークネスの視線は明後日の方向に泳いでいた。

なにせ現状生徒会書記の彼女の姿は、服が脱げかけて下着が露出し、その下着も激しいオナニーのためにズレて、乳首や性器が見えてしまっている状態だったからだ。

壁を背に立ち上がった女子は、悔しそうに歯噛みしていた。

「くっ……！ リリィダークネスか……！ 来るのが早い……！」

ダークネスは最強の魔法少女として恐れられている。

それは憑依怪人も良く知っていることだったため、かなり怯えているように見えた。

憑依怪人はその力の性質上、直接戦闘に長けてはいないのだ。

「くそお、こんなところで……！ このヒュウ様が……！」

「か、堪忍しなさい……っ！ 逃がしは、しないわよ！」

そうやって影の力を展開し、憑依怪人・ヒュウを取り囲むダークネス。

ヒュウはしきりに周囲を見渡して逃げる道を探していたが、その隙間はほぼない。

焦るヒュウだったが、ふと、自分の方にダークネスが視線を向けて来ていないことに気付いた。

「……ん？ お前、もしかして……恥ずかしがってんのか？」

「っ！ 違うっ！ バカに、しないで！」

ダークネスはヒュウが何か言う前に取り押さえようと、ヒュウに向かって飛び掛かる。

そこでヒュウは、スカートのみならずショーツまでもずり落とし、憑依している生徒会書記を下半身裸にする。

「なっ！？ な、なにしてるの！」

取り押さえようとしていたダークネスは、ヒュウにしてみれば面白いほど動揺し、目を逸らして止まってしまう。

それは敵の前で見せるには、致命的に過ぎる隙だった。

「隙ありっ」

「あっ——んぶっ！？」

すぐにヒュウの方に向き直ったダークネスだったが、その時にはすでにヒュウが距離を詰めていた。

生徒会書記の顔が目の前に近付き、柔らかい感触が口に触れる。

キスされた、とダークネスが頭で理解するのも刹那。

その合わさった口から、何か冷たいものがダークネスの体の中に入り込んでいた。

ヒュウの霊体が、生徒会書記からダークネスの中へと移動する。

抜け殻になった生徒会書記の体が、どざりと音を立ててその場に転がった。完全に昏睡しており、意識はない。一方、ダークネスは焦点の定まらない様子の目でぼーっとしていたが、ふとその目の焦点が合う。

そして、自分の両手を見下ろした。

「……………憑依、出来ちゃったよ」

ダークネスの声で、憑依怪人ヒュウが発言する。

憑依怪人と呼ばれるほど、憑依に特化した力の持ち主であるヒュウだが、実は魔法少女に憑依できたことはいままで一度もなかった。

魔法少女は聖なる力に守られており、憑依の力は弾かれてしまう。

何度か完全に気絶した魔法少女などにも試したのだが、意識がなくともあつさり弾かれ、危うくヒュウの霊体が散り散りになりそうになったものだった。

しかし今回、ダメ元で行ったダークネスへの憑依は、恐ろしいほどスムーズに成し遂げられていた。

「なんで成功した…………？ 他の魔法少女に憑依できなくて、最強の魔法少女に憑依できる理由ってなんだ…………？」
そう考えを巡らせかけたヒュウだったが、ふと自分の体を見下ろし——極上の女体を実感して、にやりと笑った。

「疑問はあるが…………まずはこの手に入れた体を楽しまなきゃ損だな…………！」

とてもダークネスとは思えない下品な表情を浮かべたヒュウは、まずは露出の大きいコスチュームで余計に目

立っている乳房を、両手で鷺掴みにする。

その乳の大きさは見るだけでもよくわかるほど大きかったが、触れるとまたその実感が違った。深く刻まれた胸の谷間を強調するように乳房を揉み、その柔らかさ、大きさを堪能する。

「うーん……いい触り心地だ……弾力も申し分ないし、柔らかさも兼ね備えている……極上のおっぱいだな……」
 そう呟いた後、ヒュウはコスチュームの胸部分を捲るようにして、乳房を露出させてみる。

すると、すでに固くなって尖っているピンク色の突起が露わになった。

「なんだ？ ちょっと揉んだだけで、もう固くなってやがんのか……？ こりゃあ、相当敏感な体質っぽいぞ……」

何気なく呟きながら、ヒュウがその乳首を指先で引っ掻くと、想像以上の刺激がそこから発生した。

「んあっ！？ な、なんだこれ……敏感すぎる、だろ……っ！」

憑依怪人として、様々な人間に憑依して来た実績のあるヒュウだが、ここまで敏感な身体には覚えがない。それくらいダークネスの体は敏感な反応を示していた。

「あんだだけ初心な反応をしといて……実はめちゃくちゃ開発しまくってるビッチだった……っわけでもなさそうだよな……」

ぶつぶつ呟きながらも一度乳首に触れる。

電気を流されたかのように体が反応し、快楽があつというまに広がってしまう。

乳首への刺激を一端止めて、ヒュウは他の場所にも触れ始めた。

セクシーな鎖骨、引き締まった腹回り、張りのあるヒップ、滑らかな太腿や二の腕、そして——ぴっちり閉じた性器。

性感帯となり得る場所や、性器そのものに触れたヒュウは、ダークネスの身体の特徴を大体掴んでいた。

「なるほどな……こりゃあ、とんでもない素質を持ってそうだけ」

ダークネスの体はどこに触れても敏感に反応していた。

それは感度が極めて高く、淫乱な体質であることを示している。その気になれば鎖骨でイケてしまいうようなほどだ。

だが、それと同時に、ダークネス自身はその体に一切性的な意味で触れていないことにも気づいた。

性交の経験はもちろんなく、恐らくは自慰すらしたことがないだろう。

「こいつは……開発するのが楽しみだ……！」

素質だけでも淫乱であることがわかるほどの敏感さなのに、そこからさらに開発し、鍛え上げたらどうなってしまうのか。

ヒュウはいまからその最高の快感を味わう時のことを考え、涎が出そうなほど楽しみになっていた。

「とりあえず……最初の絶頂くらいは、性器で味合わせてやるか」

嬉々として自慰を始める。

先程生徒会書記の体でやっていたように、路地裏の壁に背中を預け、股を開く形でしゃがみ込みながら股間を弄り始める。

コスチュームの股間部分を脇にずらし、タイツ越しに性器を弄り始めた。

弄り始めてすぐ、タイツが湿るほどの愛液が内側から溢れ出した。まだ性器の上からその溝をなぞっているだけに悶わらず、ダークネスの性器は敏感に反応しているのだ。

「くくっ……早く中に入れて欲しいってか……？ 全く、大した淫乱マンコだぜ……！」



クリトリスを刺激するために、親指の腹でその辺りを擦ると、ヒュウの想像以上の快感が股間から走り、腰が勝手に前後に痙攣する。

その快感を抑え込みながら、ヒュウはタイトツごと押し込むように、指先を性器の中へと入れる。

「うお……っ！ まだ入り口でしかねえのに……！」

ほんの入り口でしかないにも関わらず、その反応はすさまじいものだった。

挿入した指先がきゅうと締め付けられ——激しく腰が暴れ、痙攣する。

絶頂の快感が全身を駆け巡った。

「ふう……」

ヒュウが絶頂の余韻を感じていると、彼は自分の力がダークネスの魂に沁み込むような、心地よい感覚がした。その感覚に浸っていると、急激にダークネスの体の中で魔力が膨張する。

「んあっ、や、ばっ……！」

余韻に浸って油断していたヒュウの霊体が、ダークネスの体からはじき出される。

「ぐっ……！！ しまった……！！」

憑依が解除されてしまったヒュウは慌てて逃げようとしたが、ダークネスの動きがない。

恐る恐る様子を窺うと、ダークネスは路地裏の壁に体を預けたまま、気を失っていた。

魔法少女の変身が解除され、近くで倒れている生徒会書記と同じ制服姿になる。

大きく股を開いているため、制服のスカートが捲りあがり、ショーツに包まれた股間が露わになっていた。

「あられもない格好を直すこともせず、ぐったりと脱力している。どうやら危険はなさそうだと感じたヒュウは、胸を撫で下ろす。

「ふう……なんとかなったか……しかし……なんでこいつには憑依できたんだ……？」

絶頂を経験したあと特有の、冴えた頭でヒュウは考える。

魔法少女には憑依できないというのが、彼の認識だったが、ダークネスには憑依が出来た。

そもそもの魔法少女に憑依できない理由は、魔法少女たちが持つ聖なる光の力の影響だ。

闇の魔力はその魔力と相性が悪く、憑依といった力は特に聖なる力に弱い。

だが、魔法少女にも個体差は存在する。

「こいつはダークネス……光の力というには、闇よりの力……もしかして、素質自体は聖なるものより闇のものの方が強いんじゃないか？」

何かを破壊する、突破するという意味でいうならば、ダークネスの力は魔法少女の中でも随一だ。

それは何かを癒す・守るという傾向の強い、聖なる力とは対極に位置する力である。

最強の魔法少女だからこそ、闇の魔力に対する抵抗力は人一倍弱いのではないか——ヒュウはそう推測した。

「絶頂させた時、俺の魔力が一層深く浸透する感じがしていたな……これを繰り返せば、完全に支配出来るようになるんじゃないか？」

魔法少女に憑依してその力を振るえたらどんなにいいか。

常日頃からそんなことを妄想していたヒュウは、最強の魔法少女を完全な支配下に置いた時のことを夢想し――

—その顔を邪悪な笑みに歪めるのだった。

気を失ったダークネス——月奈は、まだ目覚めない。

◆第二話 女の身体

憑依怪人ヒュウを倒した翌日、月奈^{るな}はいつものように学校を終え、自分の家に帰宅していた。

ポケットの中から鍵を取り出し、玄関ドアの鍵を開け、中に入る。家はそれなりに広い家だったが、中からは人の気配というものがしない。まだモデルルームの方が温かみがあるように感じた。

その家の様子に一抹の寂しさを感じつつ、月奈は微かに痛む頭を抱えた。

(やっぱり、昨日の記憶がいまいちハッキリしない……あの子は、大丈夫そうだったけれど……)

憑依怪人に襲われていた生徒会書記のことを思い出す月奈。

あられもない格好で、胸と股間を弄っている女子の姿が脳裏をよぎり、月奈はその顔を赤くした。

(ダメダメっ！ 彼女は怪人に憑依されてたんだから……！ 忘れなきゃ……！)

脳裏に浮かんだイメージを打ち消すべく、頭を左右に振った。

彼女に憑依してそんな破廉恥な行動を取らせていたヒュウは、首尾よく撃退したはずだった。

生徒会書記がそのことをトラウマに感じないよう、記憶を操作して家に帰したことも、臆気に覚えている。

実際この日月奈が学校で会った生徒会書記は、いつもと変わらぬ地味な様子で、何の異常もなかったはずだった。

だが何か月奈の頭に引っかかっている。

その違和感を探ろうとして、昨日のことを思い出そうとすると、生徒会書記の痴態ばかりが思い返されてしま

い、上手く行かない。

(私には刺激が強すぎたのかしら……忘れなきゃ……)

「はあ……」

溜息を吐きながら、玄関で靴を脱いだ月奈はリビングに移動する。

リビングには家族間で伝言板として使っているホワイトボードがある。

そこには月奈の母親から『夕食は冷蔵庫の中にあります。荷物が届いたので部屋の前に置きました』と几帳面
そうな字でメッセージが書かれていた。

家族の間に残すメッセージとしてはあまりに固く、温かみを感じられない事務的な言葉。

夕食を準備してもらえているだけありがたいということにはわかっていたが、ここ数年、月奈は両親と食卓を囲
んだ記憶すらなかった。

そのことを自覚した月奈は、ずっと重いものが心にかかるのを感じる。

両親が健在にも関わらず、孤独を感じてしまう自分は、贅沢者だと自嘲した。

(大丈夫……今は、聖羅がいるから、大丈夫)

例えば家族の暖かさは得られずとも——親友であり、戦いのパートナーでもある聖羅がいてくれれば自分は丈
夫だと。

それは半ば言い聞かせているような状態だったが、月奈はそう信じていた。

月奈は自分の部屋に向かい、伝言版の通りにその部屋の前に荷物が置かれているのを見つけた。

「……そういえば、荷物ってなんの荷物かしら。別に何かを頼んだりはしていないはずだけど……？」
ひとまず部屋の中にその荷物を運び入れる。

彼女が抱えられる程度の大きさをしたその箱には、何かがぎっしり詰まっているような感触がした。

送り主の名前も書いていない。

本来であれば、その時点で警戒するべきだった。少なくとも魔法少女として活動している月奈には、危険なものを送りつけて来る組織に心当たりがあるのだから。

だが、なぜか月奈は送り主が不明ということに気をすることなく、何気ない調子でその箱を開けてしまう。

その目に飛び込んで来たのは——たくさんのアダルトグッズだった。

ローターにバイブ、乳首やクリトリスを吸引するためキャップや、浣腸をするためのエネマシリンジと言われる道具。

手枷足枷や、ボディハーネスなど、多種多様なアダルトグッズが詰め込まれていた。

月奈は一瞬そのグッズの意味がよくわからず、蓋を開けた状態で呆けてしまう。

だが一番上に置かれた、リアルな男性器をモチーフにしたバイブがごろりと転がると——それらの道具の用途を察し、慌てて蓋を勢いよく占める。

月奈の心臓がドクドクと激しく高鳴っており、彼女の顔は茹でたように真っ赤になっていた。

「なっ、なっ、なっ、なんでこんなものが送られてくるのよっ！？」

「誰とも知れない送り主に対して憤慨する月奈。」

それは恥ずかしい感情を誤魔化すための、八つ当たりのような感情だった。

そんな月奈の脳裏に、昨日見た生徒会書記の痴態が蘇る。

昨日の書記は素手であったにも関わらず、この時月奈が思い浮かべた光景は、箱の中に詰め込まれていたアダルトグッズを駆使して自慰をしている姿だ。

パイプを股間の穴に入れて前後に動かし、ボディハーネスでその体を彩り、ローターで乳首を刺激していた。そんな光景を想像してしまった月奈は、激しく頭を横に振り、その映像を追い払う。

「と、とんでもないいたずらだわ……！ 全く！ 誰の仕業よ……！」

ひとまず部屋の片隅にその荷物を追いやり、その上に毛布を被せ、学校のカバンを上置く。

箱の姿が見えなくなったことで、月奈は胸を撫で下ろした。

「はあ……お風呂、掃除しよう……」

どっと気疲れしてしまった月奈は、そう呟いて風呂掃除へと向かう。

体を動かして、アダルトグッズの事を忘れたかったのだ。

だが、何をどうしても、月奈は事あるごとにそのことを思い出して、いやらしい気持ちになってしまった。

最初は生徒会書記の痴態が脳裏で再生されているだけだったが、その記憶の中の書記が、徐々に月奈自身へと入れ替わっていった。

裏路地の壁に背中を預け、体を弄っている自分が、ありありと脳裏に浮かぶようになってしまった。

(違う……！　こんな、の……！)

傍から見ているなら、生徒会書記の立ち位置に自分を入れ込んだだけの妄想で済むのだが、月奈はなぜ自分で視点で自分を弄る光景をハッキリと思い浮かべてしまうようになっていた。

あまりに臨場感のある妄想に、興奮してしまう。

月奈の記憶には残っていなかったが、実際に経験した事なのだから、臨場感があるのは当然だ。

自覚はなかった月奈だが、どんどん昂っていく感情を抑えることが出来なくなる。

見えないように隠していたアダルトグッズの箱を、もう一度開いた。

その中に詰まっているアダルトグッズの山に圧倒されてしまいながらも、月奈は恐る恐るその中に手を伸ばし、一番シンプルで小さな、ピンクローターを手を取った。

(これくらい、なら……)

パイプを入れるのはさすがに躊躇われたが、ローターくらい小さいものならいいだろう、と月奈は自分に言い訳しつつ、それを持ってベッドの脇に腰を下ろした。

ベッドに背中を預けつつ、M字開脚気味に足を開いた月奈。

スカートが捲れあがり、ショーツに包まれた股間が露わになった。

(一度だけ……一度だけ、だから……っ)

月奈はそう自分に言い聞かせる。

もやもやする気持ちを晴らすため、一度絶頂してしまえばそれでいいという考えだった。

淫らな光景を思い出さないようにするためには、発散してしまうのが良いと、何かで聞いた覚えがあったのだ。ローターを手に、まずは素手で自分の股間に触れる。

ぬるつとした感触が、ショーツの内側から伝わって来た。

「……！」

散々痴態を思い浮かべてしまっていたためか、すでに彼女の股間は濡れていたのである。

そのことを実感してしまいながら、月奈はショーツの上から自分の股間を弄る。

「く、うう……っ！」

じりじりとした快感が生じ、月奈は自分の腰が自分の意志とは関係なく跳ねるのを感じた。

それをなんとか堪えつつ、今度はローターを押し当てる。

ローターはコードで繋がったリモコンがあり、月奈はそのスイッチを特に何も考えずに押ししてしまった。股間に押し当てていたローターが震動し、月奈の股間に刺激を与えた。

その振動自体は決して強くなかったが、初めてのローターの刺激に、月奈の体が激しく反応してしまう。

「きゃう……っ！ うう……ッ！」

ビクビクと月奈の肩が跳ね、体全体をぎゅっと縮込ませて快楽を堪える。

その身体の奥からじわじわと快感が湧き上がり、月奈は衝動的に空いた手で胸を鷲掴みにしていた。

「んっ、んう……っ、ふっ、んんう……っ！」

ローターを股間に当て、胸を揉む。

月奈の動きはとでもぎこちなく、とても拙かった。ほとんどの女性はその愛撫では気持ちよくなれないだろう。だが、天性の淫乱体質で、かつ敏感な性質を持つ月奈は、その拙い愛撫でも強力な快感を覚えていた。

「ふああ……ああ……っ」

快感の余り、口から奇妙な声が出てしまう月奈。

暫くそうやって刺激を楽しんでいた月奈だったが、精神が昂るにつれて、拙い愛撫では我慢が出来なくなっていた。

(く、う……っ、なんで、なの……？ もっと、もっと、気持ちよくなれる、はず、なのに……！)

記憶を失っている月奈は、憑依怪人のヒュウが与えた的確な快感のことを実感として覚えていない。

しかしその与えられた快樂のことを、月奈の体は覚えていた。月奈は無意識のうちにその時の快感を再現しようとしていたのだった。

女の体を知り尽くしたヒュウと、ほとんど初めて自慰をする月奈。

双方の手つきが違うのは当然で、たどり着ける快樂の強さも当然違ってしまっていた。

そのことを自覚できないまま、月奈はとにかくさらに強い快感を得ようと、胸を揉む力を強め、ローターをさらに強く股間に押し付ける。

「ふぐっ……！」

ローターを押し当てられた股間が、ぐちゅりといやらしい水音を立てる。

すっかり愛液を溢れさせた彼女の股間は、ショーツにシミが浮かび、その生地が股間に張り付いて、その割れ目も浮かび上がらせているほどだった。

クリトリスの主張が激しく、ショーツの上からでもその場所がわかってしまう程度には、その存在を露わにしていた。

「はーっ、はーっ、はーっ……」

息を荒くしながら、さらに強く胸を揉む。

ブラジャー越しでも感覚で乳首が固くなっていることを把握する。

この時には、月奈はすっかり自慰の虜になっており、とにかく気持ちよくなることしか頭になかった。

ローターの振動を強め、服の中に手を差し込んで直接胸を刺激する。

股間に押し当てるローターの狙いを、クリトリスに定めた。

激しく振動するローターが、月奈のクリトリスを押し潰す。

「んぎいっ!!」

とても気持ちよくなっているとは思えない声をあげる月奈。

クリトリスから走った衝撃が月奈の全身を駆け巡り、その快感を何倍にも増幅させて——股間から噴き出した。

「はふうううっ!?!」

未知の感覚に目を白黒させて悶える月奈。

溢れ出したそれは、ショーツではとても受け止め切れず、床に滴って広がっていくほどのものになった。

失禁したわけではない。

月奈は初めてのオナニーで、あろうことか潮噴きにまで達してしまったのである。

じわじわと溢れ出した愛液の面積が広がる中、月奈はそれを気にする余裕もなく、体をベッドに預け、ぐったりとして呆然としていた。

潮を噴くほど気持ちよかったのだから、満足してもいいようなものだが、月奈の手は自然と再び秘所を弄り始めてしまう。

もっと気持ちよくなれるはず、という根拠のない思いが月奈を突き動かしていた。

「ふー……っ、う……っ、んうう……っ、ん……っ」

激しい愛撫から一転。

じつくりと手を動かし、股間を弄り続ける。

もっともっと気持ちよくなりたいという想いだけが、月奈を突き動かしていた。

そうやって自慰を続けて、どれくらい経っただろうか。

「……っ！」

また小さな絶頂を迎えた月奈が体を震わせ——力尽きたように動かなくなる。

規模は小さくともひたすら気持ちよく成り続けた彼女は、すっかりその体力を使い果たしていた。

意識を保っていることが出来ず、あられもない格好で両足を投げ出した状態で、眠りに落ちてしまう。

こっくり、こっくりと頭が揺れ、やがて完全に寝入ってしまった。

チクタクと時計の針が進む音だけが部屋に響く。

そんな部屋の中に、するりと霊体が入って来た。

憑依怪人のヒユウだ。

「くっくっくっ……全くここまで上手く行くとはな……予想外だ」

小さく呟いたヒユウは、自慰をして力尽きている月奈を見下ろす。

ヒユウは一部始終を全て見ていた。

「ちよつと精神を掻き乱す程度の仕込みになればいいと思ったんだがな……」

アダルトグッズを送りつけたのは、ヒユウの仕業だった。

それによって心を乱しておけば、月奈が眠りについたあとの憑依が容易になるだろうと考えての仕込みだったのだ。

別にそれで何をどうしようというつもりもなかったのだが、まさか自発的に自慰までし始めるとはヒユウも思っていなかった。

「……昨晚の俺の行為が、そこまで影響を残していたのか？ それとも、元々そういう素質に長けていて、それが芽生えただけか……まあ、どちらでもいいか」

ヒユウはそう呟くと、改めて月奈の様子を観察する。

自慰で力尽きている月奈は、ショーツの中にローターを摘まんだ指を入れ、直接刺激を行っていた。胸を揉んでいた手も、服の中どころかブラジャーの下まで潜り込み、どんな言い訳をしてもオナニーの途中で寝落ちをし

た姿そのものだ。

「くくく……服を脱いでもいない辺り、まだまだ理性が気持ちよくなることの邪魔をしているようだな……」

ヒュウはそう分析すると、寝ている月奈の体に憑依する。

昨日同様、全く抵抗なくするりと月奈の中に入り込んだヒュウは、一端手を引き抜いた。

そして、その身に纏っていた服を脱いでいき、アダルトグッズの詰め込まれた箱の中から、ボンデー衣装を取り出した。

股間や乳房を露出させながら、その部分を強調するようなデザインのそれを身に着けると、痴女としか思えない姿になる。

「うん、やっぱり似合うじゃないか。俺の見立ては完璧だったな」

露出した乳房をぶるぶる震わせつつ、ヒュウは部屋に置いてあった大きな姿見の前に立つ。

胸を突き出し、足を開いた破廉恥なポーズを取って見せる。

「ふふっ……♡ 私は月奈。私立白雪女子高校に通う18歳。エッチなことが大好きで、おまんこ弄りながら寝ちやうのなんて、日常茶飯事なの♡」

月奈のフリをして変態じみた自己紹介を行いつつ、ヒュウは先ほど月奈も使っていたローターを手取る。

「敏感な身体を持って余してて、いつもオナニーの事ばかり考えてるわ♡ その証拠に……ほら♡ おまたのお豆ちゃんがこんなに大きくなっちゃってるう♡」

鏡の前でガニ股になり、へこへこことみっともなく腰を動かしながら、ヒュウはそのクリトリスにローターを押

し付ける。

「んひゃあああっ♡ ローターで、お豆ちゃんが潰れて、しゅごい快感がつ、頭っ、痺れ……んうううっ！♡
おまんこから涎が垂れて……っ、頭、おかしくなるうっ♡」

下品な実況を交えながら、ヒュウは激しい自慰を続けた。

「あああッ♡ イクッ、イクッ、いっちゃうウウッ！！」

あっというまに絶頂に達したヒュウは、激しく体を震わせた。

絶頂の快感が全身を駆け巡ると同時に、自分の憑依の力がさらに月奈に浸透するのを感じ取る。
余韻に浸っていると、昨日同様、月奈の魔力が膨れ上がるのを感じた。

「ん、ぐっ……！！」

昨日は弾き出されてしまったが、なんとか月奈の体から離れまいと堪えるヒュウ。

昨日ほど弾き出す力は強くない、ヒュウは辛うじて月奈の体の中に留まり続けることが出来た。

「ふう……ふう……ははっ。成功だ……！！ いいぞ、確実に浸食が進んでいる……！！」

さらに自慰を続けるヒュウは、アダルトグッズの中から、凶悪な形をしたデイルドを取り出した。

「よし……次はこいつで……んっ」

そのデイルドを口を含み、丹念に唾液を絡ませていく。

デイルドはすぐに全体がテカテカに光るようになって、怪しげな魅力を醸し出し始めていた。

それをヒュウは、自分の股間に——月奈の性器に押し当てる。

「ふーっ……」

さすがに緊張した様子で深呼吸をしたヒュウは、捻じ込むように狭い膣を割り開きながらそのデイルドを押し込んでいく。

ずぶっ、とデイルドの先端が僅かに膣に入り込み、溢れ出していた愛液が押し出されて零れ落ちる。

「んっ、んんっ、おまんこっ、ひろがっ、て……くう……!？」

さすがにキツイだろうと考えていたヒュウだが、月奈の淫乱体質は彼の想像を超えていた。

デイルドはかなり太い部類のものはずが、ぬるぬるとした月奈の膣内はそのデイルドをあっさり奥に導いていってしまったのだ。

処女の証である処女膜が僅かな抵抗を見せたものの、ヒュウがさらに力を込めると、あっさりと破けてしまう。

破瓜の痛みを感じないわけではなかったが、それ以上の快感が月奈の性器からは生じていて、鮮血もあつという間に愛液に流されてしまった。

デイルドがズブズブと呑み込まれていく。ヒュウは限界が来たら止めるつもりでいたが、その体はその予想に反してデイルドを苦も無く呑み込んでいく。

「んううううっ!」

そして、遂に。

デイルドの先端が、子宮口に到達し、子宮全体を押し上げた。

「ぶぎこっ!♡」

その瞬間生じた怒濤の快感は、ヒュウの意識を真っ白に塗り潰すほどの強烈なものだった。さらに月奈の魂に自分が浸透していくのを、ヒュウは心地よく感じていた。

それから暫くして、月奈が目を覚ました。

「あ、れ……？ 私……何を……？」

一瞬自分の状況を把握できていなかった月奈だが、自分の手が胸や股間を弄っていることに気付き、驚愕した。「わ、私っ、なんて、ことを……！？」

眠りについてもなお体を弄っていたことに気付いた月奈は慌てて手を引き抜き、立ち上がって服装を整える。僅かに下腹部に鈍痛を感じていた。

「もしかして……寝ている間に、処女を破っちゃった……とか……？」

青褪めた月奈は自分の股間を見下ろすが、そこがどうなっているのか確かめる勇気はなかった。

「ね、寝ている間も弄ってたから、よね……うん、そうよ……そうにちがいない、わ……」

ぶつぶつと自分に言い訳をするように呟きながら、月奈はひとまずシャワーを浴びるために浴室へと向かう。月奈が必死に自分に言い聞かせているのを、ヒュウは笑みを堪えながら聞いていた。

（ふむ……体をこっちの意志で動かすことは出来ないが……憑依自体は出来ているようだな。よしよし）
満足げに頷く彼は、いまもまだ月奈の心の中に潜んでいた。

体の主導権は得られないものの、憑依した状態を続け、心の片隅に存在し続けることは出来ていた。

その事実には、ヒュウは月奈の魂を確実に浸食していている手応えを感じるのだった。

(さあ、どんどん俺に染めていってやろう……くくく……リリイダークネスが『俺』となるのも、時間の問題だな)

「邪悪にほくそ笑む存在に、月奈は全く気付いていなかった。」